

TRANSZENDENTALの思想の研究 (二) : 思想史的源泉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡崎, 文明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23367

TRANSCENDENTALの思想の研究 (一)

— 思想史的源泉 —

(哲学教室) 岡崎 文明

Studium zum Gedankenaken von *Transzendental* (II)

— Eine Quelle in der Geschichte des Gedankens —

Fumiaki OKAZAKI

六 *transzendental*の思想史的源泉 (二)— *Genesis* 3の解釈をめぐって —1 トマス・アキイナスの*Genesis* 3解釈

「二八」先にわれわれは「*transzendental*」の概念の思想史的源泉をデカルトにまで遡行して探究した。そして通説に言われているように、彼の*cogito*は超越論的自我の先駆の位置にあることをテキストにしたがって確かめることができたと思われる。*cogito*は「主観性」と「有限性」という*transzendental*の必要条件を備えていたばかりではなく、*cogito*が哲学の第一原理ともなっていたからであった。さて次に、さらに進んで、われわれは「*transzendental*」という考え方の源泉を探して、中世に遡行し、トマス・アキイナスの哲学を見て、さらに*Genesis* 3へと遡源して行くことにしよう。

「二九」まず、トマス・アキイナス (Thomas Aquinas, 1225-1274) は人間精神の「有限性」を如何に解釈しているであろうか。

これはひとりトマスに限らず中世全体にわたって言えることであるが、人間の有限性は、存在論的、認識論的、倫理宗教的 (≡実践的) の三つの地平にわたって捉えられている。

トマスによれば、まず存在論的な地平では、この有限性は、根本的には被造物の「存在と本質の区別」を意味している。これは、被造物の存在はその本質によって限定されていることを指している。ここに存在者の、存在論的な意味での、有限性が現れている。(これに対して、神においてはその存在と本質が同一であり、両者の区別はない。したがって神においてはその存在を限定する本質はなく、したがって「神は限定されないもの」、つまり「無限者」となる。)

「三〇」また、認識論的な地平では、有限性は、認識者の認識能力の有限性となる。(非認識者(≡物体)は認識活動を持っていないので認識論的な地平では問題とはならない。) それでは、被造的知性である認識者の有限性はどのような形で現れているのか。そのひとつは、認識を現実態にもたせるところのもの、つまり認識を成立させるところのものである「可知的形象」(species intelligiblis)である。

トマスによれば、被造的知性はこの形象によって形相付けられて現実態となる(≡現実に働く)のである。それゆえ、この形象は認識を成立させるための必要条件である。この形象は被造的知性の内へその外から取り込まれたものである。したがって、被造的知性の認識はかかる形象を介したところの間接的認識となる。間接的な認

識は物自体 (Ding an sich) の認識ではない。ここに形象を内在せしめた主観 (＝被造的知性) から見た認識—超越論的認識の先駆—が現れているのが分かる。したがって認識論的な地平での有限性が「超越論的」の概念に繋がっていくのである。

(因に、これに対して神による被造物の認識は神自らの内にある被造物のイデアつまり可知的形象を介して被造物の認識をなすが、この形象は神自身のものであり、しかも被造物の範型であるから、これによってなされる神の認識は直接的な認識、つまり神が自己を直観することによる被造物の認識である。そしてこれは「物自体」の認識といえよう。)

「三一」最後に、有限性のもっとも素朴で解かりよい地平は、倫理ないし宗教のそれすなわち実践的地平である。中世においてはこれが有限性の理解の最も根源的な地平となる。

トマス・アクイナスは、人間の「有限性」のひとつの大きな原因は最初の間、アダムとエバの「原罪」(peccatum originale)にある、と解釈する。

「原罪」という考えは、言うまでもなく、Genesis (3:1 seq.) に記述されている³¹⁾。中世の哲学者達ばかりか聖書の記事を解釈する中で、自らの哲学を形成していった。

Genesisの冒頭は古代Israelの有名な宇宙創造の神話である。要約すれば、次の如くである。

神は六日間にわたって天地を作り、第七日目に休息した。創造の最後に人間 (アダム) を土から作った。次に彼の脇腹から肋骨を一本取り出してこれからエバを作った。そして彼らを楽園に住まわせたが、彼らは、神によって食べることを禁じられていたところの「善悪を知る木の実」を、蛇にそそのかされて、食べた。この行為が、神の戒めを破った罪、いわゆる「原罪」となる。

「三二」というので、トマス・アクイナスはSumma theologiae第二部

二の第一六三、一六四問前後において上の原罪を論じている。

トマスは「原罪という罪は何か」について次のように述べている。

人間の最初の罪(＝原罪)は高慢であったことは明かである³²⁾。
(カッコは筆者の補足。以下同様。)

それでは「高慢」(superbia) はなぜ罪になるのだろうか、否、そもそも高慢とは一体何であるのか。トマスによるとそれはこう言われている。

高慢とは、人が、意志によって自分が本来あるものよりも上に向かうところから名付けられている³³⁾。

しかし疑問は続く。では、なぜ、上に向かうところの向上心が罪であるのか。トマスは続けてこう言う。

正しい理法 (ratio recta) は次のこと、つまり各人の意志は自分に相応しいものへと向かうことを持っている。それゆえ、高慢は正しい理法に反する何らかのものを含意していることは明らかである。これが罪の性格をなしている³⁴⁾。

アリストテレスによれば、意志のみならず万有は各々の固有の場所 (＝本来の目的) を有している。そして、自然本性的にこれに向うところで、意志的被造物における高慢とは、正しい理法を外れ人間の持つ本来のもの (目的) を超えて上であることを欲することである。そしてこれが罪となる。

これに似た思想は既に古代ギリシアの神話—ヘシオドス—にも見いだされる³⁵⁾。

因に、これに対して、人間の持つ「本来のもの・分」「固有の目的」を守ることを称して、「高慢」の反対概念である「謙遜」

(humilitas) と言ふ⁽⁹⁾。

しかし「本来的なもの・分」を守るといふことは、いわゆる「人間社会における身分、身の程」を守るといふ社会道徳を意味しているのではなく、「人間の本来的な目的からそれないように気をつける」ないしは「人間の本性を逸脱しないように気をつける」といふことを意味している。

「三三」さて、それでは、アダムの有罪は如何にして立件されるのか。トマスは、つぎのように考へる。

一般に「罪」といふものが成立する順序は、まず第一に、「魂の内的な動」(motus interior animae)、『つまり「心」の動きにおいて「無秩序」(inordinatio)が見い出される。その次に、「身体の外的行動」(actus exterior corporis)、『つまり「行為」において「無秩序」が見い出される、という順序である⁽¹⁰⁾。

したがって、原罪も、第一に「魂」(anima)、『つまり「精神・霊」(spiritus)において「無秩序」が見いだされるのである。「精神・霊において」といふのは、最初の人間は「無垢の状態」(status innocentia)にあつたので、肉体はその精神・霊に抵抗し逆らうというようなことは全くなかつたからである⁽¹¹⁾。換言すれば、最初の人間は純粹に精神的でプラトニックであつた。そこから、トマスはこう言う。

それゆゑ残るところ、人間(≡アダムとエバ)の欲求の最初は無秩序は、精神的・霊的な何らかの善を無秩序に欲求したことから生じた。だが、神の定めによつて決められたそれぞれの分に應じて、それを欲求したのなら、無秩序に欲求したことにはならなかつたはずだ。してみれば残るところ、人間の最初の罪は、精神的・霊的な何らかの善を、自分の分を超えて、欲求したことにあつた⁽¹²⁾。

つまり、原罪の罪たる所以は「自分の分を超えて」(supra suam mensuram) 無秩序に、精神的な善を求めた」ことにあつた。

先に述べたように「三三」精神が「自分の分」(≡固有の目的)を超えて行こうとすることが「高慢」であつたから、原罪は高慢であつたということになる⁽¹³⁾。

「三四」しかし翻つて考へてみれば、トマスは、原則的に人間の究極の幸福は「神に近づき神に似ることにある」と考へる⁽¹⁴⁾。そこがらすれば、「神のように善悪を知る者となる」ことがどうして罪となるのであろうか。

そこで、まず、神に「似る」とは如何なることかについてトマスの見解を見ておこう。トマスは次のように言う。

類似には二通りがある。一つは、全く同等であるといふ意味で類似している場合である。最初の両親はこの意味での神への類似を欲しなかつた。なぜなら、このような神への類似は、とりわけ知者(≡最初の両親)の考へに浮かばないことであるからである。いま一つは、模倣点があるといふ意味で似ている類似(similitudo imitationis)である。このような意味で被造物が神に似ることは可能である。被造物は自らの状態に應じて神の類似性から何らかのものを分有しているからである。……(中略)……ところで被造物において存在する善はいずれも、第一善の何らかの類似性を分有している。それゆゑ既述のごとく、人間は何らかの精神的・霊的な善を自らの分を超えて欲求したということから、彼は神に似ることを無秩序に欲求したことになる⁽¹⁵⁾。

ここでは、最初の両親(≡完全な知者ではないが後の人間から見れば知者)は、第一の意味での類似、即ち全く神に似ることを欲したのではなく、第二の意味での類似、即ち模倣点があるといふ意味で

神に類似することを欲した。しかし彼らは「自らの分を超えて」(『*upra suam mensuram*』) 神に、模倣点があるという意味で、類似することを「無秩序に」欲した。そしてこのことが「罪」であるというのである。

「三五」では、「分を超えて無秩序に神を真似る」とは、具体的には一体如何なることであろうか。

トマスによると、人間が神への類似を分有するときに(『模倣点がある類似 *similitudo imitationis*』)、精神的・霊的な善は三つの仕方人間に見い出される。これをトマスは次のように言っている。

じつさい、第一の仕方では、精神的・霊的な善は、自然・本性の存在そのもの (*ipsum esse naturae*) に従ってである。このような類似はそもそも創造の最初から人間に刻印されていたのである。この人間について『創世記』(1:26-27)の中に「神は人間を自らの似姿と類似へ向けて作った」とある。また天使についても同様である……(中略)……。これに対して第二の仕方では、精神的・霊的な善は、認識 (*cognitio*) に関するかぎりで、人間に見い出される。天使はこの種の神への類似を、その創造の際に受取った。……(中略)……。しかし最初の人間は、その創造の際に、いま言った類似を現実には未だ受け取ってはいなかったのであり、ただ可能的に受け取ったにすぎないのである。第三の仕方では、精神的・霊的な善は、働く権能 (*potestas operandi*) に関するかぎりで、人間に見い出される。天使も人間も、そもそも創造の初めにかかる神への類似に現実には未だ到達していなかった。なぜなら両者は至福に到達するために、為すべき何かを残していたからである¹³⁾。

ここでは、類似は存在論的地平、認識論的地平、そして倫理宗教的すなわち実践的地平の三つの地平で考察されている。精神的・霊的

な善は、存在論的には、人間に既に刻印されているので真似る必要はない。しかし認識論的には、この善は未だ人間には実現していません。単に可能的にあるに過ぎない。また、倫理宗教的(つまり実践的)には、まだ現実には究極の幸福(『至福』)に到達してはいないので、これから努力して実践(『行為』)をしなければならぬ、と言っている。

「三六」以上よりすれば、最初の人間に生じた罪は、まず、存在論的地平では不可能である。ゆえにトマスはこう言っている。

それゆえ両者、すなわち悪魔(『堕ちた天使』)も最初の人間も、神に類似することを無秩序に欲求したとは言え、両方とも自然本性の類似を欲求して罪を犯したのではない¹⁴⁾。

したがって、残るところ、この罪は、認識論的地平と倫理宗教的(実践的)地平において生じたことになる。まず、トマスは、認識論的地平における罪を、右に続けてつぎのように言っている。

しかるに、最初の人間は、善悪の知 (*scientia boni et mali*) に関して神に類似することを欲求することによって根源的に(第一に)罪を犯したのである。それは丁度、蛇がエバに次のように提案したようにである。すなわち、最初の人間は、行為するために、何が善であり何が悪であるかを、固有の自然本性の力によって、自分で決定するように、と提案した如くである。あるいはまた、未来にどのような善あるいは悪が自分におこるのかを自分自身で予め知るように、と提案した如くである¹⁵⁾。

最初の人間は、認識論的地平で「神のように善悪を知る者となる」ことを根源的に目指したために、罪に陥った、と言うのである。その内容は二つある。その一つは、人間が自分の自然本性の力・権力

によって自分に都合のよいように何が善で何が悪であるかを自分勝手に決めることであり、いま一つは、未来に自分の都合のよいように前以て知って、自分勝手に善悪を生ぜせしめることを意味している。

しかし実際のところ、自分で善悪を自由に決定する力を持つ者は「神」以外には居ないのである。

「三七」もし自分の都合に合わせて勝手に善悪を決めたり、自分に有利になるように未来を決めようとする人間が居るとしたら、それは「独裁者」(tyrannus)にほかならない。

彼の自由な振る舞いの結果どのような不幸が人々の間に生じるかは、ヒトラー (A.Hitler, 1889-1945) やスターリン (I.V.Stalin, 1879-1953)、毛沢東 (1893-1976) などの独裁者達の行状を思い浮かべてみれば、十分であろう。であるから、かかる無秩序な欲求に、そのような不幸や悲惨が原理的に萌芽している。ここにまず根源的に、罪の性格が見られる、というわけである。

換言すれば、「神のように善悪を知る」とは「神の如く善悪を自分で自由に決定する・作る」ことを意味している。これは人間にとっでは荷が勝ち過ぎる。人間の力の範囲を本性的に越え出たことである。すなわち、これは、人間の本来の在り方・目的を越え出たことであり、これが「分」(mensura)「本来の目的」を超えているということである。この越権が「罪」というわけである。

以上が、認識論的地平で捉えられた原罪である。トマスによれば、これが最も根源的な罪の性格を持つ。

「三八」最後に、倫理宗教的(即ち実践的)な地平における罪である。これについてトマスは次のように述べている。

最初の人間は、働きをなす固有の権能に関して神に類似しようとして欲することによって、第二(副次的)に罪を犯した。すなわ

ち、自然本性の固有の力によって、至福をもたらすために働いたのである。……(中略)……しかるに、悪魔は権能に関する神への類似を欲求することにより罪を犯した。……(中略)……ただし両者(＝悪魔と最初の人間)は或る点に関して神と同等になることを欲求した。すなわち、両者は神の定められた掟を軽んじて、他に従属せずに自らの意志で行動しようとしたのだからである¹⁶⁾。

行為・実践的地平での罪は、認識的地平に続いて、この意味で「第二(副次的)に」生じる。

最初の人間は自分の持つ権能・権力が神に似ることを意志して「行動」を起こした。すなわち認識のみならず、「行動」(＝実践)においても神の如くなることを意志した。自分の力で究極の幸福・至福になろうと意志して「行動」を起こした。しかしこれもスターリンなどを思い起こすまでもなく、人間の力を本性的に越え出た行為である。

なぜなら、人間は本来、自分自身の能力の範囲に「本来的な幸福」を所有してはいないからである。人間は、自分が幸福になるためには、自分よりも高貴な「自分以外のもの」を必要とするのがその本来の在り方である。

しかるに、最初の人間は自分の固有の力の範囲で幸福になろうと欲して神を真似しようとしたのである。これは人間本来の在り方を破った越権行為となる。これが「神の戒めを破った罪」である。ここに第二(副次的)にはあるが、罪の性格が見いだされる。

簡単にまとめれば、天使も人間も創造の最初は無垢であったが、最初の人間と或る天使は、力・権力において神と同等になることを欲求した。その結果、自分の本来の分を越えて行動してしまった。これが最初の罪―原罪―である。

「三九」それでは、最初の人間は原罪の結果どのような罰を受けたのであろうか。これはGenesis 38以下に記されている⁽¹⁷⁾。

では、トマスはこれを如何に解釈するのであろうか。端的に言えば、原罪に対する罰は「死」(mors)である。これをトマスは、*Summa theologiae* 第二部の二の第一六四問第一項において、つぎのように解釈している。

(1) 人間は造られた最初に神によって「恩恵」(beneficium)が与えられていた。この状態は、人間の精神(mens hominis)が神に従う限りで、魂の低位の力は理性的精神(rationalis mens)に従い、身体は魂に従うようになっていたことを意味する。

(2) ところが、人間の精神は罪を犯すことによって神への服従(divina subiectio)をやめた。その結果、「恩恵」が失われた。この恩恵の喪失自体がすでに「罰」の性格を持っている。

(3) すると、魂の低位の諸力は理性に完全に服従しなくなり、肉体的な欲求が理性に対して反抗するようになった。また、身体も魂に完全に支配され制御されることがなくなった。ここから身体の「死」とその他の身体の衰えやこの世の苦しみが生じた。これが「罰」である。

右からもわかるように、ここでいう「死」とはまず第一に「肉体の死」を意味している。

「四〇」同書同問の第二項では、さらに具体的に「最初の人間」の「罰」について論じている。既述の如く根源的には罰は神の「恩恵」の喪失である。ここから次のことが具体的に生じる。

(1) まず、最初の人間の「楽園」からの追放である。これは至福の喪失を意味する。

(2) 次に、身体と魂(corpus et anima)において罰が生じる。まず、身体・の罰であるが、女には、家庭を作り子供を産むことと夫に従うことが、罰として与えられる。男には、生活に必要な糧を汗を流して供給することが罰として与えられる。それは、働く土地が不

毛であること、苦しい労働があること、そして耕す土地には作物を阻むいばらとあざみが生え出ること、である。

(3) 次に、魂には三重の罰が与えられる。第一は、精神・霊に対して生じた「感覚・肉の反逆」である。ここから「裸に対する恥じらい」(＝肉欲)が生じた。これがGenesisの「二人の目が開け、自分たちの裸であることがわかった。」の解釈である。

第二は、「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。」と言って神は人間の罪を嘲笑している。つまり「嘲笑の罰」である。

第三は、「あなたは、ちりだからちりに帰る。」あるいは「主なる神は人とその妻のために皮の着物を造って、彼らに着せられた。」と記されているが、これは「死」刑の宣告―死を目前にした恐怖―という罰を意味している。

これらは人間の持つ本性的な「有限性」を指している。

「四一」このように「原罪」の思想は、中世とりわけトマスでは、人間の持つ「有限性」の原因を説明するものとなる。この有限性は、既述の如く、存在論、認識論、倫理宗教の各地平において現れている。

とはいえ、原罪に対するトマスの解釈は総じて倫理的宗教的色彩が濃厚である。既に見た認識論的地平での罪の解釈にしても、純粹に認識論的ではなくて、むしろ善悪にかかわり、倫理的宗教的に方向付けられ秩序付けられた認識論的地平である。また、魂の罰の解釈も、認識論的な側面、換言すれば精神的な側面の説明が不十分である「三六一―三七」。

これはしかし、トマスの責任ではない。彼の生きた時代が、そもそもGenesisが哲学や思想の源泉書として歴史的かつ文献学的に、すなわち客観的に研究されていた時代ではなくて、信仰の書、宗教の書として主体的に受け取られていた時代であったからである。

「四三」だが、認識論的な側面での解釈が不十分であった原因のうちひとつは、「主観性」の探究がなお不十分であったことによると思われる。「主観性」は、哲学的に厳密な意味では、デカルトによって発見されたことができるであろうが、中世の哲学にもその先駆はあった。

中世で問われた原罪とそれをめぐる諸問題は、その他のすべての種類の罪と罰をも、宗教的のみならず、倫理的あるいは法的な地平においても、大きな課題として人々に気づかせ印象づけたであろうことは想像に難くない。事実、一三世紀以降長く神学教育の標準的教科書の座にあったペトルス・ロンバルドゥス (Petrus Lombardus, 1100-1160/69) の『命題集』⁽¹⁶⁾には、この方面の相当具体的な諸問題が、微に入り細を穿って詳細に考察され論じられているのが見られる。

さらにそもそも「罪と罰」が問われる場合は普遍 (= 学) の地平においてではなくて「個」 (= 倫理宗教) の地平においてである。なぜなら、罪と罰は本性的に「個的」であるからである⁽¹⁷⁾。そしてかかる個は「私」つまり「主観」を意識化し主題化する。したがって、中世という時代では「主観性」「われ」が意識化されていなかっただと考えるべきではない。「原罪とその罰」を中心とする罪と罰への深刻な問題意識の中で、既に「主観性」「われ」は強く意識化され主題化されており、これが間接的にデカルトの「われ」の発見に繋がっていくと考えられると思われる。

それゆえ、transzendentalの必要条件——「有限性」と「主観性」——は中世の長い期間を通じて温められ醸成され深められていたということができようであろう。

「四三」しかし「このようなGenesisの解釈は、中世で終わったわけではない。歴史的に見れば、後の時代に委ねられる部分もあった。カントのtranszendentalはGenesisの失楽園神話の解釈を認識論的な方向に徹底していったものと見ることができよう。またキェルケ

ゴールの「死」「絶望」、ショーペンハウアー (A.Schopenhauer, 1788-1860) やニーチェの「意志」などの諸概念も、中世以来のGenesis解釈の長い歴史の延長線上に生れ出てきた思想であると思われる。その意味で西洋哲学史における「存在の優位性の思想」の伝統系譜では、Israelの神話の哲学化が、今もなお続いていると言いうことができるであろう。

註

(一) Genesis 3. 1-7. Sed et serpens erat callidior cunctis animalibus terrae quae fecerat Dominus Deus. Qui dixit ad mulierem : Cur praecepti vobis Deus ut non comederetis de omni ligno paradisi ? Cui respondit mulier : De fructu lignorum, quae sunt in paradiso, vescimur; de fructu vero ligni, quod est in medio paradisi, praecepit nobis Deus ne comederemus; et ne tangeremus illud, ne forte moriamur. Dixit autem serpens ad mulierem: Nequaquam morte moriemini. Scit enim Deus quod in quocumque die comederitis ex eo, aperientur oculi vestri; et eritis sicut dii, scientes bonum et malum. Vidit igitur mulier quod bonum esset lignum ad vescendum, et pulchrum oculis, aspectuque delectabile; et tulit de fructu illius, et comedit, deditque viro suo qui comedit. Et aperti sunt oculi ambo; cumque cognovissent se esse nudos, consuerunt folia ficus, et fecerunt sibi peizomata.

(二) Summa theologiae, II-II.163.1.c. manifestum est quod primum peccatum hominis fuit superbia. (以下Summa theologiaeを省く) 達意の訳『トマス・アクィナス神学大全』第二二分冊(創文社)一九九二)を借用した(但し一部を拙論のロンナスに合わせ変更した。以下同様)。

(三) II-II.162.1.c. superbia nominatur ex hoc quod aliquis per voluntatem tendit supra id quod est:

(四) *ibid.*, Habet autem hoc ratio recta, ut voluntas uniuscuiusque feratur in id quod est proportionatum sibi. Et ideo manifestum est quod superbia importat aliquid quod adversatur rationi rectae. Hoc autem facit

rationem peccati:

(5) 広川洋一『クシオキム研究序説』(未来社一九七五)° 特に序論参照
(6) II-II,q.161,1.c. Una (virtus) quidem quae temperet et refrenet
animum, ne immoderate tendat in excelsa: et hoc pertinet ad virtutem
humilitatis. (抑息を神聖の舞う° 云々(同釋°))

(7) *ibid.*, q.163, 1.c. Manifestum est autem quod primo invenitur
inordinatio in motu interiori animae quam in actu exteriori corporis:

(8) *ibid.*, Sic autem homo erat in statu innocentiae institutus ut nulla
esset rebellio carnis ad spiritum. Unde non potuit esse prima inordinatio
appetitus humani ex hoc quod appetierit aliquid sensibile bonum, in quod
carnis concupiscentia tendit praeter ordinem rationis.

(9) *ibid.*, q.163,1.c. Reliquitur igitur quod prima inordinatio appetitus
humani fuit ex hoc quod aliquid bonum spirituale inordinate appetiit. Non
autem inordinate appetivisset, appetendo illud secundum suam mensuram
ex divina regula praestitutam. Unde relinquitur quod primum peccatum
eius fuit in hoc quod appetiit quoddam spirituale bonum supra suam
mensuram.

(10) *ibid.*, Quod pertinet ad superbiam. Unde manifestum est quod
primum peccatum hominis fuit superbia.

(11) I,q.12,a.1.c.&a.5.c.

(12) II-II, q.163,2.c. duplex est similitudo. Una omnimoda aequiparanti-
ae. Et hanc similitudinem ad Deum primi parentes non appetierunt: quia
talis similitudo ad Deum non cedit in apprehensione, praecipue sapientis.
—Alia autem est similitudo imitationis, qualis possibilis est creaturae ad
Deum: inquantum videlicet participat aliquid de similitudine ipsius
secundum suum modum. ... Quodlibet autem bonum in creatura existens
est quaedam participata similitudo primi boni. Et ideo ex hoc ipso quod
homo appetiit aliquid spirituale bonum supra suam mensuram, ut dictum
est, consequens est quod appetierit divinam similitudinem inordinate.

(13) *ibid.*, Primo quidem, secundum ipsum esse naturae. Et talis

similitudo ab ipso creationis principio fuit impressa et homini, de quo
dicitur, *Gen.1, [vv.26-27], quod fecit Deus hominem ad imaginem et
similitudinem suam*; et angelo, de quo dicitur, ... — Secundo vero,
quantum ad cognitionem. Et hanc etiam similitudinem in sui creatione
angelus accepit: unde in praemisissis verbis, cum dictum esset, ... Sed
primus homo in sua creatione istam similitudinem nondum actu adeptus
erat, sed solum in potentia.—Tertio, quantum ad potestatem oprandi. Et
hanc similitudinem nondum erant in actu assecuti neque angelus neque
homo in ipso creationis principio: quia utriusque restabat aliquid agendum
quod ad beatitudinem perveniret.

(14) *ibid.*, Et ideo cum uterque, scilicet diabolus et primus homo,
inordinate divinam similitudinem appetierint, neuter eorum peccavit
appetendo similitudinem naturae.

(15) *ibid.*, Sed primus homo peccavit principaliter appetendo
similitudinem Dei quantum ad scientiam boni et mali, sicut serpens ei
suggessit: ut scilicet per virtutem propriae naturae determinaret sibi quid
esset bonum et quid malum ad agendum; vel etiam ut per seipsum
praecognosceret quid sibi boni vel mali esset futurum.

(16) *ibid.*, Et secundario peccavit appetendo similitudinem Dei quantum
ad propriam potestatem operandi, ut scilicet virtute propriae naturae
operaretur ad beatitudinem consequendam: ... Sed diabolus peccavit
appetendo similitudinem Dei quantum ad potestatem: ... Veruntamen
quantum ad aliquid uterque Deo aequiparari appetiit: inquantum scilicet
uterque sibi inimiti voluit, contempto divinae regulae ordine.

(17) *Genesis 3:8-24*, Et cum audissent vocem Domini Dei deambulantis
in paradiso ad auram post meridiem, abscondit se Adam et uxor eius a
facie Domini Dei in medio ligni paradisi. Vocavitque Dominus Deus
Adam, et dixit ei: Ubi es? Qui ait: Vocem tuam audivi in paradiso: et
timui eo quod nudus essem, et abscondi me. Cui dixit: Quis enim
indicavit tibi quod nudus esses, nisi quod ex ligno de quo praeceperam

tibi ne comederes, comediti? Dixitque Adam : Mulier, quam dedisti mihi sociam, dedit mihi de ligno, et comedi. Et dixit Dominus Deus ad mulierem : Quare hoc fecisti? Quae respondit : Serpens decepit me, et comedi. Et ait Dominus Deus ad serpentem: Quia fecisti hoc, maledictus es inter omnia animalia et bestias terrae; super pectus tuum gradieris, et terram comedes cunctis diebus vitae tuae. Inimicitias ponam inter te et mulierem, et semen tuum et semen illius: ipsa conteret caput tuum, et tu insidiaberis calcaneo ejus. Mulieri quoque dixit : Multiplicabo aerumnas tuas, et conceptus tuos; in dolore paries filios, et sub viri potestate eris, et ipse dominabitur tui. Adae vero dixit : Quia audisti vocem uxoris tuae, et comediti de ligno, ex quo praeceperam tibi ne comederes, maledicta terra in opere tuo; in laboribus comedes ex ea cunctis diebus vitae tuae. Spinas et tribulos germinabit tibi, et comedes herbam terrae. In sudore vultus tui vesceris pane, donec revertaris in terram de qua sumptus es; quia pulvis es, et in pulverem reverteris. Et vocavit Adam nomen uxoris suae, Heva, eo quod mater esset cunctorum viventium. Fecit quoque Dominus Deus Adae et uxori ejus tunicas pelliceas, et induit eos. Et ait : Ecce Adam quasi unus ex nobis factus est, sciens bonum et malum; nunc ergo ne forte mitat manum suam, et sumat etiam de ligno vitae, et comedat, et vivat in aeternum. Et emisit eum Dominus Deus de paradiso voluptatis, ut operaretur terram, de qua sumptus est. Ejecitque Adam, et collocavit ante paradisum voluptatis Cherubim, et flammeum gladium atque versatiliem ad custodiendam viam ligni vitae.

(81) Petrus Lombardus, *Sententiarum libri quattuor* (1150/54/57)

(91) 前掲『ノロックスとトマス・アキナスにおける善と存在者』三四〇頁参照

2 Genesis 3の近世現代哲学的解釈—純粋な認識論的解釈—

「四四」それでは最後に、Genesisの失楽園神話の解釈を認識論的な方向から補うことを試みてみよう。これは近現代の哲学的精神にそった解釈の試論である。

Genesisの記述によると、「善悪を知る木の実」を食べた結果、「目が開けた」。すると最初の人間は「善悪を知る」ようになった。では「善悪を知る」とは如何なることであろうか。トマスの解釈によると、神の如く「善悪を決定する力・権力を持ち、これを行使する」ことであった。これはしかし、どちらかと言えば倫理宗教的(実践的)な立場に重点を置いた解釈である。これに対して純粋に認識論的立場からは次の如く解釈され得る。

(1) 最初の人間が「善悪を知る」ようになったということ、すなわち彼に「目が開けた」ということは、まず、彼が「自我に目覚めた」ことを意味していると解釈される。

これは「自己」の出現を意味する。「自己」とは「主観」である。ここから、人間はこの「主観」を中心にして「自己」の外なる世界を見て、認識せざるをえなくなった。ここに必然的に、自己を中心据えた遠近法的 (perspective) な見え方、認識の仕方が出現する。

「主観」があるかぎり、本性的に自己中心性すなわち遠近法性から免れることはできない。いかに聖人君子といえども、彼が主観を持つている限り、これから免れることはできないのである。この主観性は「transzendental」の必要条件であった「1」。

このような「主観性」あるいは自己中心性、遠近法性に縛り付けられたことは、「限定性」すなわち「有限性」を有したことになる。この状態を称して「原罪の罰」という。だが、この「有限性」も、認識論的には「transzendental」の必要条件であった「1」。それゆえ、transzendentalとは原罪に由来した結果であると解釈することができるとであろう。

かかる「主観性」と「有限性」は、それ自体が既に「罰」の性格を持っていると言えらるる。

(2) さらに Genesis の失樂園神話は次のように解釈できる。原罪以前には、人は神と共に歩んでいた。そこには自分の立場すなわち自我はなかった。人は神と一体であった。ちょうど幼子が母の胸に抱かれて安心しているように、最初の人間は、神という根源の懐に抱かれて孤独も不安もない幸せな状態(＝至福)にあった。

しかしひとたび「自我」に目覚めるや、人間は神から離れ、根源を見失い、その結果不幸に陥った。

そのわけはこうである。精神は「自我」というものに限定された。するとそこに「神からの独立心」が生じる。さらに「自由(墮罪以前の自由から変質した自由ではあるが)」を求める心が生じる。ここから「根源からの離反」が始まる。

その結果、自我に「責任」が生じる。また「孤独」と「不安」そして「精神の死」即ち「絶望」が生じる。この「責任」、「孤独」、「不安」、「精神の死」即ち「絶望」などは原罪の「罰」である。このようにして自我は不幸に陥る。

「四五」(3) また、「善悪の知」が生じるところには、自他の一体性が崩れ、自我と他我の区別が生じる。換言すれば、自己と他者の区別が生じる。すると、第一に、神(＝根源)は自己にとって他者となる。第二に、仲間も他者となる。

ここから、自己は他者を直接に認識することができなくなる。せいぜい己の腹に押し当てて他者の状態を推量し思いやることしか出来なくなる。このように神(＝根源)と仲間を見失い両者を他者にしてしまったこと、これは「罰」の性格を帯びる。

そこから人間には「ではどうすれば自分と異なる他者を認識することができなのか」という認識論的な課題が生じる。これは transcendental の問題に真っ直ぐに繋がる。

(4) また、「善悪を知る」とは、「善悪を判断すること」を意味している。と解釈される。

善悪の判断には、判断の立場が必要となる。神から見て善いこと

でも人間から見れば悪いこともある。例えば、「罰」(poena) というものがそれである。罰は、それを受ける人間の立場から見れば決して善いものではなく、明かに悪いものである。しかしこの同じ罰でも、神の立場から見れば善い。このように善悪には「判断の立場」が見られる。

善悪の判断は、人間同志の間では立場と立場の相異から相対的となる。ここから人間世界における「価値の相対化」が始まる。この価値の相対化は「罰」の性格を帯びることになる。

「四六」(5) 自他の別のあるところには自他の立場の相違がある。立場の相違があるところには自他の価値判断の相違がある。自他の価値判断の相違があるところには、自我と他我のぶつかり合いが生じ得る。そしてこの果てはやがて戦争にまで発展する。なぜなら、そもそも「争い」や「闘い」とは、自我に価値を置き、自我の保存や自我の防衛から生じるからである。これは自我の出現による「罰」である。

(6) 「善悪を知る木の実」を食べて「目が開けた」ことは、中世では肉欲が生じたと解釈されていた。しかしそればかりではない。さらに、最初の人間に「自己認識が生じた」と解釈され得るであろう。Genesis には、最初の人間は「自分が裸であることを知り、かつ自分の裸を恥ずかしく思った」ことが述べられているからである。自己認識をすることは人間の固有性である。人間の自己認識はあらゆる他者認識に先立つ。そして自己認識の深さにおいてのみ他者を認識することができる。しかしこのように他者認識が自己認識を介してしか成立し得ないということは、認識上の大なる「制限」である。それゆえこれは「罰」の性格を帯びる。

(7) 「善悪を知る木の実」を食べて善悪を知ることとなった。同時に「自我」も生じた。すると人間は自分にとっての「善」を迫及し獲得しようとする。利益の奪い合いが生じる。ここからいわゆる「利己主義」が生じる。かかる「利己主義」は人間の原罪の結果、

つまり「罰」である。

端的に言えば「自我」の出現が人間の運命的な不幸——人間にとつて不可避の悪——の始元となっていることが解かる。これがまさに原罪の原罪たる所以である。

七 結 論

「四七」このようにGenesisを、倫理宗教（＝実践）的ではなくて、純粹に認識論的かつ精神的な立場から解釈することによって、ここから存在や実践の問題に迫ろうとしたのが近現代の哲学のひとつの方向ではないかと思われる。ここでは哲学の中心的課題として「主観」ないし「自我」が主題化されている。これは中世にはない近世以後の独自の解釈であると思われる。

しかし中世のGenesis解釈は誤っていたというわけではない。あるいはまた逆に、中世でGenesis解釈は完成したというわけでもない。未完の部分は近世以降に補充されていたと考えられる。

かくしてGenesis解釈の中からtranszendentalという思想も生まれてきた。シルソンが言うように、GenesisとErodusは「存在の優位性の思想伝統」を作った。しかしこの中に「存在」の思想のみならず、また「transzendental」の思想も育まれ成長した。この意味で「transzendentalの思想」は「存在の優位性の思想」伝統のもうひとつの大きな特徴であると言えよう。

「四八」ところで、この二つの特徴は実は深く関連し合っていると思われる。この関連を明かにすることは後日の課題にしたい。

また、今回は、如何にして超越的なるものの認識が可能となるかというtranszendentalの内容にまで立ち入って論じることができなかった。これも今後の課題としたい。

さらに「transzendentalの思想」は、「善の優位性の思想」伝統に

直接的には見い出され得ない。何故であらうか。この事情についても、右の二つの課題と共に、後日稿を改めて考察してみたい。

—了—

付記

① 拙稿は、平成六年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）による研究成果の一部である。

② 拙稿は、第一回西洋哲学史研究会（平成七年三月二十六日）において口頭発表した原稿に修正を施したものである。

③ 拙稿は、もともと同題名（一）と一つの原稿であったが、投稿規定により二分した。

（平成七年四月二四日）

Studium zum Gedanken von *Transzendental*
 —Eine Quelle in der Geschichte des Gedankens—

(*Seminar für Philosophie*)

Fumiaki OKAZAKI

INHALT

I Einleitung	(124)
II Etymologie von <i>transzendental</i>	(122)
III <i>transzendental</i> in der neuzeitlichen Philosophie—Kant—	(121)
IV <i>transzendental</i> in der gegenwertigen Philosophie	(120)
1 Phänomenologie—Fusserl und Heidegger—	(120)
2 Analytische Philosophie—Frege, Russell und Wittgenstein—	(117)
V Eine Quelle von <i>transzendental</i> in der Geschichte des Gedankens (I)	(116)
—Descartes' <i>cogito</i> —	
VI Eine Quelle von <i>transzendental</i> in der Geschichte des Gedankens (II)	(112)
— <i>Genesis</i> 3—	
1 Thomas von Aquins Auslegung von <i>Genesis</i> 3	(112)
2 Eine moderne Auslegung von <i>Genesis</i> 3	(104)
—im Horizonte einer Erkenntnistheorie—	
VII Schluß	

(Kanazawa, 24. April 1995)